

気がつくと僕は高校の図書室にいて、真紀の姿を探していた。頭の中が消しゴムをかけたようにぼんやりして、窓の外の景色もまた、煤けたようにはげている。息を吸いこむと肺まで灰色に染まりそうな、そんな曇天だ。いや、そういえば雨が降っている。不思議なほど音がしないから気づかなかつた。図書室の中からも、何の音も聞こえない。

ぐるりと見渡すと、がらんとした閲覧室には僕以外に誰の姿もなく、ただ鉄製の書架に整列した本だけが、ホルマリン標本のように行儀よく並んでいる。

コツコツコツ。靴音をたててリノリウムの床を歩く。何をしている？ 真紀の姿を探している。今まで彼はここにいたのだから。いや、もういない。今はもう。

——今は？

ふと立ち止まって、僕は僕自身の独白に首を傾げる。それなら真紀は、今までここにいたのだろうか？ 教師からも生徒からも見放されたような、この無人の図書室に。そもそも僕はどうして真紀を探している？ いつから？ なぜ？

どうにも胸がざわざわと落ち着かない。背筋を這うのは寒気だろうか。ブウウン、ブウウン。どこからか蠅の羽音が聞こえてくる。同時に、胸の奥でぞわぞわと蛆虫のうごめく感覚。ちよつとでも唇を開けば、今にも中から蠅が飛び立ちそうだ。けれど、僕は死体じやない。生きている。今はまだ。だから、ただの錯覚に過ぎないとはわかっているのだけど。

喉の奥からせり上がる吐き気は、焦燥によるものだろうか。

けれど、僕にはわからない。そもそもが馬鹿げた話だ。この場所に真紀がいるはずがない。あんなに居心地が悪そうにしていたじゃないか。書架に挟まれた長身は窮屈そうで、ここにいるべき人間ではないのだと一目でわかった。外へ駆け出そうとする足を、衝動を、無理やりねじ伏せるようにしていつも側に。ブウウン。頭が重い。自分が何を考えているのか、考えようとしているのか、まるでわからなかつた。そもそも、どうして僕は真紀を探しているのだろうか。ここは家の中なのに？

——兄さん。

突然の声に振り向くと、そこに弟の正人がいた。薄暗いリビングの、見慣れたソファに一人で腰かけて。

「——え？」

思わず口から出た声は、单音のまま言葉にすらならない。はつと頬を張られた心地で瞬きをする。まるで白昼夢から覚めたような。ザアアア。閉じられたカーテンの向こうからは、降りしきる雨の音がする。それでも灰色の湿り気を帯びた室内は、写真のように静かだつた。

そうだ、僕は高校から帰つて来ていたのだった。ここは僕の家で、図書室じゃない。当然ながら真紀もいない。それなら、途方に暮れたように真紀を探し続けていたあの記憶は、ほんの一瞬の、夢のようなものだったのだろうか？

「——何してるの？」

訊ねられて、ようやく僕は僕のしていることに気がついた。

ブウウン、ブウウン。

蠅の唸るに似たこの音は、冷蔵庫のモーター音だ。それも聴覚を包みこむほどに大きい。僕は一人で台所に立つて、ひやりと硬い冷蔵庫の把手を握っている。真っ白で巨大なその箱の、内側にあるものを覗こうと。

「開けない方がいいよ、冷蔵庫なんて」

いや、それだと夕飯をつくれない。お前だつて何も食べられないじゃないか。

「もともと、僕は何も食べないよ」

冗談にしたつて無茶がある。死人でもあるまいし。

笑つて言うと、視線の先で弟はかすかに唇を歪めた。硬く凝った苦笑は、まるで失敗した苟立ちの表情のようにも見える。「そもそも冷蔵庫は、死体をしまうための装置なんだ。家庭的に死体を保管するための、唯一の方法。魚の死骸。獣の臓器、植物の亡骸……：あるものと言えば、蠅と蛆虫から遠ざけられた死体ばかりだ。たとえ空っぽだととしても、それは棺なんだよ」

「相変わらず変なことばかり考へるんだな、お前は」

「考へたのは、僕じやない」

「え？」

「——兄さんだよ」

ぞつと背筋を震わせて、僕は不可解な息苦しさにブレザーの胸元を掴んだ。どうしてだろう。うわざるように心臓の鼓動が速くなる。肺が凍えて、息を吸いこんだまま吐き出せない。

一体なぜ、何に、誰に、僕は怯えているんだろう？

「兄さんが考えたんだ。死んでしまった体を冷蔵庫の中にしまえば、冷蔵庫そのものになるんじゃないかなって。その瞬間、イキモノはモノになる。もう傷つけない。もう苦しめない。もう他人じやない。この家の一部になるんだ。それなら、ずっと一緒にいられるんじゃないかなって」

それは——と声にしようとして、舌が強張る。

視界が一気に白くなり、貧血による目眩にも似たそれは、さらに白い冷蔵庫の扉を僕の鼻先へと近づける。ブゥウン、ブゥウン。耳を塞ぐように聞こえるのは、冷却機のモーター音か、それとも内臓の腐り落ちた死体の、腸で渦巻く蠅の羽音か。唇を開こうとして、僕はためらう。ああ、駄目だ。わざかに開いた歯の隙間から、今にも蠅が飛び立とうとしている。僕が、腐敗した腹の中で飼っている蛆虫が。

「——それでも、きっと兄さんは」

そんなことは、もう忘れたんだろうけどね。